令和８年度　山口県立大学 国際文化学部 国際文化学科
一般選抜（前期日程）「小論文」問題用紙（持ち帰り）

以下の文章を読み、問１、問２に答えなさい。

アメリカでは、支部図書館がバーチャル･ボウリング大会や、読書クラブや、カラオケ大会などのプログラムを提供して、高齢者の活動的な生活を大きく助けている。高齢者センターも、高齢者を自宅から社交的な世界に引っ張り出す役割を果たすが、同じ年齢層の人としか会えないし、少しばかりスティグマ(注)のある場所だ。アメリカの高齢者には、社会保障制度とメディケア(高齢者向け医療保険)など、経済難をしのぐための基本的な支援はあるが、身体的・社会的活動を促す支援はほとんどない。たとえば、公園では高齢者向けのイベントが開かれることもあるが、①たいてい高齢者のニーズを満たすように設計されていない。ほとんどの図書館や団地もそうだ。だが、世界には、高齢者の生活を充実させるために、社会的インフラに大規模かつ思慮深い投資をしてきた国がある。アメリカではほとんど知られていないが、高齢者の健康増進が社会の大きな課題となるなか、外国のしくみを理解することも重要だ。

私は長年、高齢者の健康と社会的活力の維持を助けている場所を探してきた。そのもっとも目覚ましい例の１つはシンガポールだろう。シンガポールの平均寿命は 83.1 歳で世界第３位だ(1 位は日本の 83.7 歳、2 位はスイスの 83.4 歳。イギリスは 20 位で 81.2 歳。アメリカは 79.3 歳で 31 位だ)。シンガポール国民の約 80% (高齢者はさらに多くの割合)が、公営団地の分譲アパートに住んでいる。ただし購入にあたっては、政府の手厚い補助がある。公営団地のほとんどは、体操ができる広場と、住民が思い思いに集まれる空間、そして屋台村「ホーカーセンター」(たいてい地下にある)など、活気ある共有エリアを備えている。「こうした場所はいつも混みあっている」と、私の案内役を買って出てくれた「暮らしやすい都市センター(CLC)」のウェイダ・リムは言う。私たちはトアパヨ地区にある団地のホーカーセンターで、ラクサ(訳注：東南アジアの麺料理)の昼食をとっていた。「もちろん高齢者は大勢いる。シンガポール全体がそうだ」。シンガポールでは、人口の８人に１人が 65 歳以上だが、2030 年には５人に１人になるとみられている。「多くはひとり暮らしだ。ここは、そういう人たちが毎日やってきて、知りあいを見つけられる場所だ」

トアパヨはシンガポールの典型的な住宅地だ。何棟もの高層集合住宅が、石畳の小道や歩道でつながっている。小さな花壇がいくつもあって、低層の商店もたくさんある。私はトアパヨ以外に５つの地区の団地も訪問した。それぞれスタイルは違っていたが、いずれも素晴らしい社会プログラムと、緑たっぷりの憩いの場、そして飲食店を含むさまざまな商店があって、幅広い世代の人たちでにぎわっていた。こうした共有エリアは、多くの人に頻繁に使われていたが、いつも清潔で、手入れが行き届いていた。また、住民の治安に対する関心は高く、最新の犯罪情報を知らせる掲示板を設置している団地もあった。とはいえ、犯罪は非常に少なく、トアパヨの掲示板は空欄だった。それに犯罪といっても、ほとんどが軽犯罪だ。高齢者は散歩中も、買い物中も、自宅のようにくつろいでいた。長く蒸し暑い午後には、日陰のベンチで昼寝をしている人も多かった。

（中略）

屋外での遊びを通じて世代間交流を促すもっとも野心的な試みは、フィンランドに見ることができる。自治体が遊具メーカーのラプセットと協力して、「３世代の遊び空間」をつくったのだ。ラプセットの公園には、年齢に関係なく利用できるトンネルやジャングルジム、ブランコなどの遊具がある。この公園では、利用者が一定のリスクを引き受けるとともに、文化的な適応を強いられる。中高年者は、「子ども向け」と考えられてきた遊具を使うことにともなう、気恥ずかしさや決まりの悪さを克服する必要がある。市場調査によると、こうした公園で遊ぶ意欲がもっとも乏しいのはフランス人で、とりわけ熱心なのはドイツ人と北欧人だった。ただ、ひとたび使いはじめると、どんな国の高齢者もすぐにその恩恵を感じる。フィンランドのロバニエミ工科大学の研究チームが、65～81 歳の高齢者 40 人を観察したところ、「児童遊具」で遊びはじめてから３カ月で、バランスやスピードや身体協応性が改善して、転倒のリスクが低下した。ある 63 歳の女性は、BBC に対して、公園のバランス遊具を使いはじめたときは、「平均台を歩くゾウ」のような気分だったが、３カ月もすると、渡り切る時間が１分超から 17 秒に短縮したという。だが、②本当の成果を感じられたのは公園の外だ。若いときのようにパワーと自信を持って近隣を歩き回れるようになったというのだ。

(注)「スティグマ」とは個人や集団が持つ特徴に対する否定的なレッテルを意味する。

(出典：エリック・クリネンバーグ著・藤原朝子訳『集まる場所が必要だ―孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』英治出版、2021 年、189-191 項、194-195 頁。出題のため、一部改変している。)

問１　下線部①について、筆者がそのように考える理由を簡単に説明し、身体的・社会的活動を促すための「思慮深い」支援の在り方について、本文の内容を踏まえて 400 字以内で自分の言葉で述べなさい。

問２　下線部②について、本文中の「世代間交流」を「多文化交流」に置き換えた場合、どのような時に「本当の成果」を感じられると考えますか。具体例を挙げて、400 字以内で述べなさい。

令和８年度　山口県立大学　国際文化学部　国際文化学科
一般選抜（前期日程）「小論文」問題
出題意図・採点基準

【出典】
エリック・クリネンバーグ著・藤原朝子訳『集まる場所が必要だ―孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』英治出版、2021年、189-191項、194-195頁。

【出題意図】
本書は、現代社会における人々の孤立や分断の問題を、「人が集まる物理的な場所（居場所）」の在り方に着目して分析し、コミュニティの再生や福祉、都市政策、多文化共生などを考える上で重要な示唆を提示している。出題文では、デジタル化や効率化が進む現代社会において、人と人が偶然に出会うことのできる「開かれた場」を設け、そこに高齢者を積極的に引き出すための仕組みについて、諸外国の具体的な事例を挙げて紹介している。問1では、身体的・社会的活動を促すための「思慮深い」支援の在り方についての著者の説明を正確に読み取り、世代間交流の場の在り方や仕組みについて、その内容を理解したうえで、自分の言葉で言い換えられているかを評価する。問2では、世代間交流を多文化交流に置き換え、具体的にどのような提案ができるかを問うとともに、それを適切な日本語で表現できているかを確認する。